

『建武年中行事』雑考（一）

佐藤厚子

後醍醐天皇（在位、文保二・一三一八～延元四・一三三九）は、生涯のいつの時期にか、年間の宮廷行事の一つ一つを採り上げてその次第を記し、解説を加えるという作業を行っていた。後醍醐の自撰になるこの儀式書を、後世に『建武年中行事』と称する。

その序文には、

も、しきのうち、はたとせの春秋をおくりむかへて、今もかつ見るうちの事どもは、おぼつかかなるべきにもあらぬを、いまさらにかきつけんも、めづらしからぬ心ちすれど、をりにふれ時につけたる大やけごとども、行末のかゝみまではなくとも、おのづからまたその世にはかくこそ有けれ、などやうの物語のたよりには成なんかし。

とあって、文章をそのままに受け取れば、在位中に実際に行われた儀式の様を書き記したものであることになる。だが、それが果たして実践されたものなのか、それとも、実践の有無とは別のレベルでなされた故実の研究成果といったものなのか、ということについて、本当のところは明らかでない。

従来、この書は、宮廷行事のあり方を知るための資料として、主に有職故実の分野で扱われてきた。しかし、『建武年中行事』の読

み方は、もつと自由であつてよい。後醍醐という個性豊かな天皇が、如何なる意志を以てこれを編んだのか。或いは、このような作品が現れるための、文化的・社会的な環境とはどのようなものだったのか、等々。接近の方法は多様である。むしろ『建武年中行事』というテキストは、あらゆる角度からの読みを、それ自身が求めている、そういった類のものではないか。その呼びかけに応じ、本文から手繰り寄せられたさまざまなテーマについて、しばらく考えを巡らしてみることとしたい。

元日の節会——その一

○陣の座の内弁作法をめぐって

元日の節会、内弁の大臣、陣の座につきてことを行ふ（もし第一の人にあらざして、位次の大臣ならば、内弁を仰すべし）。藏人をまねきて、外任の奏を奏す（はこのふたに入れたり）。藏人、内侍につけて奏聞す。これを御覧じて返し給ふ（もししばし程をへば、うちにとゞめおきて、出御の期に臨みてかへし下さるべし）。七曜御りやく、はらかの奏など、内侍所につく

べきよし奏す。

『建武年中行事』の元日節会についての記述は、内弁の大臣の指揮下に外任の奏・諸司の奏が行われるというところから始まる。

諸司の奏とは七曜御曆・氷様・腹赤御贄の奏を総称したもので、元来は節会次第に重要な位置を占める儀であったが、時代の降るに従って徐々に簡略化されていった。即ち、弘仁十二年（八二二）成立の『内裏式』に記す節会次第の冒頭部分は、朝拝終了後、天皇の豊楽殿遷御——内弁の謝座・昇殿着座——陰陽寮が庭中に立ち曆を奏し、主水司と太宰使とがそれぞれ氷様・腹赤を奏す——群臣参入という運びになっている。それが十世紀末、源高明撰の『西宮記』では、次第そのものは同前ながら、中務の曆奏、宮内の氷様・腹赤の奏には、いずれも「或付二内侍所二」との注記があり、さらに十一世紀末から十二世紀初頭の大江匡房撰『江家次第』になると、天皇の南殿出御以前に内侍所に託して奏するという略儀が定着して、次第も、曆奏、氷様・腹赤の奏——天皇の出御——内弁の謝座・昇殿着座——群臣参入という順序に変わっている。「諸司奏可レ付二内侍所一由、件次被レ奏」、つまり、それまでの儀式書には見られなかった外任の奏を蔵人に付けて奏する、そのついでに、諸司の奏を内侍所に託す旨をも奏するという。注として「日晚若雨降若諸司不レ具時也」と記すのは、諸司の奏を内侍所に付けてすることはあくまでも略儀なのだという認識が、『江家次第』にもあることを窺わせる。しかし、「節会雨儀」の項、「所司奏等付二内侍所二」に注して「近代不レ論二晴雨一皆付レ之」とあるように、実態としては、既にこうした手順で行うのが通例となっていた。

『建武年中行事』の元日節会についての記述が、天皇の南殿出御以前の外任の奏・諸司の奏から始まるのは、『江家次第』の頃には

既に定着していた新儀の次第に従っているのである。

諸司の奏の簡略化とは、換言すれば、これが節会の中核から排除され単なる付随行事となってゆくことである。そうした流れは、もと節会に先立って行われた朝拝の衰退と、ほぼ期を一にしている。元日にあたって天皇を拝するとともに、宇宙の運行リズムを記す曆を献じ、氷室の氷の形状によって当年の豊作を予祝し、遠国の珍珠を奉るのとは、まさしく、太陽神の子孫の支配する豊葦原瑞穗国の王権儀礼というに相応しい。だが、年毎の節会を主催する天皇もそこに集う宮廷貴族たちも、徐々にそうした神話的背景を忘れて去り、節会に諸司の奏を行うことについて殆ど意味を認めなくなっていた。おそらく十世紀前後を境として、元日節会は、古代国家の王権儀礼から、新しい時代のありかたに即応した儀礼へと、その内実を変化させていったのである。

中世の王権儀礼として変容を遂げた元日節会の、その内実とは何か。諸司の奏が儀式の中心からはずされれば、元日節会は、天皇から宮廷貴族たちに賜う酒肴の宴という性格のものとして、ほぼ完結することになるだろう。“宴”の中に立ち現れる新しい王権の像。

——一挙にテーマを絞って考えてみるという方法もあるが、ここは敢えて遠回りをしても、当面の対象にこだわってみる。例えば、宴前段の次第としてだけ遺る諸司の奏を記すことに、『建武年中行事』はどのような意義を認めていたのだろうか。簡略化したその儀に、なお古代王権の残像を探り当てようとしていたと考えることも、全くの誤りとはいえないだろうが、しかしそれだけではあるまい。

最初に引用した元日節会冒頭の本文は、『群書類従』によるもの。全体に際だった諸本の異同の少ない『建武年中行事』にあって珍しく、この部分には異文が確認されている。

元日の節会、其儀、小朝拝はてぬれば、内弁の大臣、陣の座につきてことを行ふ〔もし第一の人にあらずして、位次の大臣ならば、内弁に候ふべきよしを職事をもて仰せらるゝなり〕。大方よろづの公事を、一上たる人は、前をわたすまじきにや。陣のはしの座をはかりて、藏人をまねきて、外任の奏を奏す〔はこのふたに入れたり〕。藏人、内侍につけて奏聞す。これを御覽じて返し給ふ〔又諸司奏之。諸司の奏は、内侍所に付くべきよしを奏す。もししばし程をへば、うちにとゞめおきて、出御の期に臨みてかへし下さるべし〕。七曜御りやく、はらかの奏など、内侍所につくべきよし奏す。

傍線を付したところが、谷村光義『建武年中行事略解』本・黒川氏藏本・和田英松藏本にあって『群書類従』本にない部分。『略解』本には、さらに最後の「七曜御りやく……」の文に付して、

〔腹赤の奏など、古は庭にすゝみて奏しけるとかや〕との注記もある。

『略解』の本文は、『公事根源』「元日節会」の冒頭とほぼ同じ文になつていて、この形が古くからあったものかどうかについては、若干疑問のあるところだが、『建武年中行事』の記述の一般的傾向を見るには、この異文をも並べて参考にするのが便利である。

『建武年中行事』の記述に関して注意を惹かれることの一つに、天皇や大臣以下がそれぞれの立場や任務を以て儀式に携わる、その場合の作法を、とりたてて詳しく述べる傾向が見られるということがある。元日節会についていうと、天皇の南殿出御の際や酒肴の宴での作法、内弁の謝座の作法、外弁の王卿の昇殿作法、参議が御酒勅使を仰する際の作法、宣命使の作法、等々。諸司の奏の記述も例外ではないのであって、『群書類従』本の本文でもそうした傾向は

認められるが、異本にはさらにはつきりと特徴が表れている。

内弁は、儀式の総指揮を執る役。原則として臣下のうち最も高位にある者がその任に当たる。『内裏式』に定める節会の内弁の役は「若無二大臣一者、参議已上得レ之」とあるが、『西宮記』になると、有資格者の範囲がせめられて「大臣不レ参之時、納言依二宣旨一行二内弁事一」とされ、さらに『江家次第』では「若非二一上一者、可レ被レ仰二内弁一」というように、左大臣以外の右大臣や内大臣がこれを務めるのは原則からはずれるのだと、確認されるようになる。

さて、節会に参加する王卿は前もって左近の陣の座に集合する。そして、内弁を務める者が確定しその定席である端の座に着くと——これは常時設けられているわけではないので、王卿の数などを考慮し適当な位置を見計らつて南端の座に着くのである——、宴の開始に備えて諸司の具否を問ひ雑事を取り仕切る。他の王卿は、酒肴の宴の始まるまで待機すべく、承明門外に出る。

ところで「外弁」という呼称は、『西宮記』以下「王卿着二外弁二」「親王以下、起二外弁座二」と、承明門外の所定の座をいうかのうに、或いは承明門外に待機する王卿の総称のように用いられている。だが、内弁・外弁について一条兼良の『江次第鈔』が、「第一大臣於承明門内、弁備諸事、故曰内弁。第二大臣以下於承明門外、弁備諸事、故曰外弁」と、両者を対照させて説くのは、少なくともその原義をいうものとしては、当を得ているのではなからうか。なぜなら、門外の陣の座で宴の準備を指揮する内弁に対して、かつての節会では、門外の上卿にも、諸司の奏のために控える中務や宮内の具否を問うという重要な役割があつたはずなのだから。しかし、諸司の奏が簡略化した段階で内弁がこれを指揮するのに、門外の上卿を経由する必要はまずないのである。門外の上卿に、諸司の奏以

外のことを弁備するという任務が全くなかったわけではないが、副指揮者を務めるべき外弁の上卿の影が節会にあつて極めて薄く、ついに外弁の語の原義さえ忘れられていったのは、おそらく諸司の奏の簡略化の流れとも無縁ではなかったのではあるまいか。『江家次第』が、陣の座での内弁の仕事を列挙する末尾に、「奉^レ仰^レ仰^レ外記^一。往年王卿就^二外弁^一後被^二仰下^一者、外記伝^二仰外弁外記^一、外弁申^二外弁上卿^一云云」とし、「往年……」の頭書に「中古以来無^二此儀^一也」とあるのは、内弁の指揮下に門外のことを取り仕切るべき外弁の役割が、いつの頃からか無きに等しいものとなっていた事態を、推測させるのである。

簡略化された諸司の奏は、節会の次第そのものとしては殆ど意味を失っていた。しかし、総指揮者たる内弁が、節会の開始にあつてまず何をどう行うかを記すことは、重要であつた。『建武年中行事』の記す節会次第は、儀式に携わる者たちが、それぞれに課せられた役割を定められた所作に従つて遂行していく、その作法の連鎖である。より正確に言えば、『建武年中行事』は、節会の次第そのものではなく、作法の連鎖によって成り立つ節会というものを記しているのである。作法の連鎖によって成り立つ元日の節会。その幕開けを告げるに相応しいものとして、陣の座における内弁が、次第の筆頭に置かれるのである。

『建武年中行事』の節会についての記述は、他の儀式書一般に比較すれば、天皇の所作に細かな注意を払っているといえるのだが、しかし、その細やかさの程度は、大臣の務める内弁の作法や、参議の役である宣命使等の所作に対する場合に比べても、それほど差があるわけではない。『建武年中行事』の記す節会にあつては、天皇作法も大臣や参議のそれも、節会を構成する要素として、等しく重

要なものなのである。だがそれにしても、こうした形の儀式書が生まれるためには、それ以前に、さまざまな作法についての情報の蓄積がなされていなくてはならないはずである。

節会における内弁の作法は、十一世紀初めには既に儀式を形作る重要な要素として整備されつつあつた。一例を挙げると、『北山抄』は、天皇着座の後、内弁が召しにより宜陽殿の元子を立ち、軒廊から庭に斜行して謝座を行うという部分で、「出^レ自^二軒廊東第二間^一」に注記して、「清慎公出^レ自^二第一間^一、九条大臣用^二第二間^一一者。而彼御記、不^レ見^二下用^二第一間^一之事上。廉義公被^レ記^二下出^二入自^二第二間^一之由上、豈垂^二先公之教^一、用^二他家之說^一乎」と述べている。

念のために意識しておく、小野宮実頼は軒廊の第一間、九条師輔は第二間を用いたとされるのは誤りで、実頼も第二間を用いたのである。何故なら実頼の日記には第一間を用いたという記事は見えぬ。また実頼の子、頼忠の日記にも第二間を用いたと記されている。頼忠がわざわざ他家の作法を採るはずはなく、これは必ずや父の作法を踏襲してのことだ、というのである。『北山抄』を編んだ藤原公任は、頼忠の子である。先に、内弁の役は原則として左大臣の務めるものという認識が徐々に浸透してゆくことを述べたが、左大臣を出すような家も、この頃から藤原忠平の子孫に固定してゆき、それに伴つて、家に固有の作法が、日記や記録などの文書や口伝の形で代々伝えられるようになるのである。但し、そうした作法についての知識は、必ずしも直系の子孫の独占するものとはならず、書物の貸借や日常の交流の中で情報交換を通して、職務を遂行するためこれを必要とする者たちに共有された。『北山抄』が、小野宮流と九条流とを並べ挙げて一般の理解に訂正を求めているのも、その背景に、当時の宮廷貴族たちの開かれた知識環境があつたからであり、

そこでの儀式書の役割が、豊富な情報を整理し再確認することにあつたためである。

『江家次第』の頃になると、家職の固定化は一層進み、一の人を出す家は道長子孫に限られている。藤原忠実の談話を筆録した中原師元の『中外抄』に、『江家次第』は忠実の父の師通が匡房に命じて編纂させたものであるという話が記録されているが、『江家次第』元日宴会の条に、特に「内弁細記」の項目が設けられ、装束、笏紙の押し方、謝座の際の練り方等々、微細に記しているのは、或いは、彼の書の編纂の動機として、特に摂関家に資するという事情があつたことと関わるのかも知れない。ただ、摂関家に伝わる内弁作法などは、もとより秘伝の類に属するものではなかつたのであつて、「内弁細記」の叙述の仕方からも、それはわかるのである。例えば、笏紙の押し方を述べるくだりに、「故資房卿云、小野宮流召^二外記^一於前^一令^レ押^レ之、外記具^二統飯^一来押^レ之、当^二帶上程^一押^レ之、次上卿奏^二奉^一下可^レ令^レ候^二内弁^一由仰上^レ之後、於^二陣後^一令^レ押、或公卿出^二外弁^一之後、乍^レ居^二陣座^一召^二外記^一押^レ之、御子左大臣以^二笏紙^一向^レ外持^レ之、人為^レ奇」などとし、或いは、庭中での謝座を了え軒廊に戻ることを述べた後に、「重明親王記云、暫顧^二来路^一、此事問^二申故^一二条殿^一、被^レ仰云、若疑^二懷中扇^一疊紙落有^二砂跡^一一歟」と記しているように、それは、諸家の作法を記すだけでなく、直接問接の見聞によって学び得たことを書き留める、という形で綴られているのである。

儀式作法の知識に関するこうした情勢は、内弁作法だけでなく、天皇の作法についても、さほど変わりはなかつたといふことができる。十一世紀の段階では、天皇家も、天皇の「職」を相承する家という性格を持つようになつており、諸家と同様に、代々の天皇が日

記等の形で天皇作法を伝えたが、それについての知識もやはり天皇家の占有するものではなかつた。例えば、これは節会の作法に関する記事ではないけれども、『江家次第』忌火御飯の条に、供膳の際の天皇の所作を記して、「是経信卿説、後冷泉院御時儀云、不^レ知^二何事^一、予以^二此説^一申^二後三条院^一、被^レ仰云、後朱雀院御記無^二所見^一、自^レ其以来此事已絶」と注している。ここに窺われる通り、日常的にも儀式の場においても天皇に近侍してさまざまな任務を負う蔵人層などは、自らの職務をこなすためにも天皇作法に通暁している必要がある、また知識を得る機会も多かつたのである。

なお、「内弁細記」で先人の意見として頻繁に名の挙がる「故二条大関白」「故二条殿」とは、藤原教通のこと。後三条天皇の蔵人を務めた匡房は、天皇からも、時の関白からも、それぞれの家の作法について身近に学ぶ場面の多かつたことがわかる。

こうして、十一世紀頃には既に、天皇と公卿、そして蔵人等天皇の側近たちとの間で、作法についての情報交換や知識の蓄積が、確実に行われていたのである。その蓄積された情報や知識の中に浮かび上がる儀式的様は、『建武年中行事』の記述に透視される節会のそれと、大きく変わるものであつたのだろうか。『建武年中行事』の記すところの、さまざまな作法の連鎖によって成り立つ節会というものの、それはやはり、天皇と宮廷貴族たちの知的交流から生まれ、日常的な連帯感の中で細心に育まれた、中世の節会の一つの姿だつたのに相違ない。後醍醐天皇は、その新政において、家業と結びついた従来の家格序列を全面的に否定する人事を行い、「職」の体系を破壊して「個別執行機関の総体を天皇の直接掌裡に入れる」という、専権的な国家体制の構築を目指したのだといふ。とすれば、後醍醐にとつて、『建武年中行事』に描き出される如き節会の世界は、

まさに克服すべき既存の国家体制そのものであり、またこれを書き記すことは、古代国家の復活のためというより、むしろ目前の敵を掌握し支配するために不可欠な作業であったのかも知れない。

項目を閉じる前に、内弁が節会の開始前に指揮を執る陣の座の、その位置について一言触れておこうと思う。左近衛の陣に関しては、早く裏松光世の『大内裏図考證』が、「宜陽殿、付・上古左近陣」の項で、「按。上古、左近陣在宜陽殿西廂、與右近陣相對。後世、移于紫宸殿東北廊南面。年月來由、俟後考。」と、時代によってその位置に変化のあることを指摘している。最近では、『国史大辞典』もこの説を採用しており、正当性が認められつつあるようである。しかし、『建武年中行事』の最も詳細な、しかも新訂版でより手近な参考書ともなった『建武年中行事註解』には、『拾芥抄』を引いて、左近は日華門内、右近は月華門内という従来の通説が示されるのみであり、うっかりこれに従えば、中世の節会における内弁の動きを辿ることなど、まず不可能となる。一例を挙げよう。内弁は、陣の座での諸事弁備を了えると、宜陽殿の元子に着いて昇殿の勅許を待つ。『江家次第』によれば、内弁の座は、宜陽殿西土廂の北行第四間、即ち宜陽殿正中にあたる額の間の南隣に、柱と平頭に設けられる。つまり、勅許を伝えるべく紫宸殿の東簀子に臨む内侍を、右手前方に迎える形となるのだが、内弁がその座に着く際には、「先於二陣座後一着靴之後、聞二近杖警声一、自二壇上一南行着之」としている。陣座は、紫宸殿東の軒廊に近接した内弁の座より南にあるのではなく、北に位置することが前提とされているのである。

『江家次第』の節会記事を読む場合、内弁の動き以外にも、節会装束のくだりに「左近陣座南庭中央東西行、曳二班幔二条一、（一条始レ從二紫宸殿東面北階南端一、東行竟二庭中一、一条其東端幔柱南

去三許尺、小西進立二幔柱一、東行竟二宜陽殿西廂部一」とあるところなどは、左近陣の座を日華門内に想定しては解けない。さらに、『江家次第』からやや時代の降った藤原師長の『妙音院相国白馬節会次第』でも、内弁の笏紙を押す作法の一として「藏人仰内弁。畢退去。後内弁起座。出自宣仁門左青瑣門等。立陣後壁外。（東第二間北向立。）令押笏紙。」とあって、陣の座は、『大内裏図考證』が後世そこに移ったという通りの位置にあっただろうことが確認される。節会の内弁にとって重要な任務遂行の舞台となった左近陣の座は、少なくとも十一世紀以降については、日華門内ではなく、紫宸殿東北廊（仁寿殿南廊）の南面にあったとするのが正しいのである。

注

- (1) 『公事根源』（物集高見編『新註皇学叢書』）
- (2) 『妙音院相国白馬節会次第』『元日節会次第』等、参照。特に「はしの座をはかりて」との言い方については、『北山抄』大臣昇殿の場面に「右廻参上着座（計レ座着レ之）」とあることなどを参考にした。
- (3) いずれの儀式書でも、即位式などの「外弁大臣」の指揮は、次第の中でかなりの重みを持つものとして扱われている。
- (4) 『神道大系』の「解題」にこの部分を採り上げて、「頼忠は実父実頼の作法でなく叔父師輔と同じ作法を採り入れていたから、公任もそれを「先公之教」として用いたのである。」と説いている。しかし、『江家次第』『内弁細記』に「或説清慎公出自二東第一間一、是日記人謬也、所レ被レ出三入自二間一云云」とあり、「或説」は『北山抄』の記述を指していると考えられるので、これを参考に別解を提案しておく。

(5) 佐藤進一氏『日本の中世国家』第三章第二節「建武新政」

○宝剣・神璽

主上出御。台盤所にて典侍、剣を内侍につたへ給ふ（ゐてこれをつたふ。内侍これを取りて、やがてたつなり）。左の内侍、鳥居障子をいでてすゝむ。額の間にいたる。右の内侍、しるしのはこを給ふ事、剣のごとし、御後にさぶらふ。

天皇のあるところ、常に剣璽が随伴する。二つの宝器は、普段は清涼殿夜御殿に安置され、天皇の移動に際しては、内侍二人が各々これを捧げて天皇に従う。行幸の場合には、殿舎の外にある間のみ、近衛次将が内侍に代わり剣璽の護持にあたることになっていたといふ。

節会に際しても、剣璽は天皇とともに南殿に渡り、御帳台の内、御座の東側の机に安置される。

掌侍、剣璽を御帳の内、東の机の上におく。左の内侍、伝へとりて、璽を剣のうちざまに置く。蔵人（六位）式の筥を右の机に置く。

御座の西側の机には、天皇のための次第のマニユアルとして『内裏式』が置かれている。『江家次第』によれば、折り本の『内裏式』上の帖を、御座に着いた天皇から見て文頭が右になるように、開いて置いてある。また、剣璽の内侍は節会の間、御帳台の背後西を太宋屏風や通障子で仕切った一角の、囊床子に掛けて控える。『建武年中行事』の該当部分、「内侍は二人ともに、御帳の西、通障子の内……床子二脚あるにつきてさぶらふなり。」の注に「うるはしくはあらず。まへにゐるなり。」とあり、内侍は囊床子に浅く腰掛けるとしているが、これは、内弁に昇殿の勅許を伝えたり、宣命・見参の文杖を取り次ぐといった役を務めるのに起居に支障のないように、ということであろうか。節会が終われば再び剣璽を捧げて天皇

還御に随伴するのである。

『建武年中行事』の本文にひかれて、つい本題を外れかけた。この項目を立てたのは、元日節会における剣璽の扱われ方とか、剣璽の内侍の役割とかを見るためではない。そうではなく、むしろ『建武年中行事』以前の、天皇或いは宮廷貴族たちにとって、剣璽とはどういうものだったのか。その一端を、彼らの手になる故実書や記録の中に窺い見ることが目的なのである。

順徳天皇（在位、承元四・一二一〇―承久三・一二二一）の『禁秘鈔』「禁中事」は、「賢所」・「大刀契」に続けて「宝剣神璽」の題を掲げ、剣・璽それぞれの由来を述べている。その内容を簡単にまとめれば、以下のようになる。¹⁾

①宝剣とは、神代に三つあつた剣のうちの一つである。それについてはいろいろと子細があるが、ここに記すのは無理である。以来、宝物として伝えられて来たが、寿永の頃、源平争乱によつて壇ノ浦の海中に失われ、後鳥羽天皇の代以後二十数年間は、清涼殿の昼御座御剣を以てこれに代えた。だから、剣璽の移動の際には璽を先に立てた。しかし、承元の土御門天皇讓位、即ち順徳踐祚の時から、伊勢神宮の禰宜が夢想によつて献上したものを宝剣になぞらえることとなり、璽より剣を先とするようになった。この剣は、蒔絵の鞘である。

②神璽は、神代からのものが、変わることなく現在まで伝えられている。寿永の頃の争乱の際には、一旦は海没したにもかかわらず見付け出された。璽を入れた筥は、上を青色の絹で覆い包み、紫の糸で網状に結わえてある。内侍がこの筥を捧持する場合は、結わえてある緒の下の方を少し緩め、そこに指を入れて持つのである。

③宝剣と神璽は、夜御殿の御帳の内、枕上の二階厨子の上に安置されている。覆いは、内蔵寮の献進する赤色の打ち物。剣璽を捧持するのは内侍の役目だが、直にこれを取ることはせず、典侍が取って伝える。但し、讓位の時に限っては、典侍は先帝に従い殿を出るため、内侍が直に取って近衛次将に引き渡す。

④剣璽の扱いにはそのような決まりがあるので、上臈の典侍以外の人は、また上臈であっても僧の娘は、夜御殿に立ち入ることをしない。仮初めに朝餉間に置く場合でも同様に、上臈以外の女房や僧の娘が近侍することはない。およそ、重軽の服に着く者は、剣璽に手を触れない。また月の障りの内侍が、他に人のない場合に剣璽を持つこともあるけれども、これはあつてはならぬことだ。内侍と近衛次将の他は、一切手を触れない。天照大御神がこれを見て我を見る如くにせよと仰せられた、神代からのその誓いを、決して疎かにしてはならぬのである。

⑤神璽の筥を動かすと、中には鏡らしい物が一つ入っているようだ。筥をひっくり返したりせぬよう、重々注意しなくてはならない。匡房の『江記』に曰く、不浄の人は手を触れず、移動に際しては内侍に守護させる。また、夜御殿の火を絶やさぬのは、そこに剣璽を安置してあるためである、と。

⑥壺切の剣というのは、代々の東宮に伝えられる宝物である。しかし、時によっては東宮に渡らず天皇のもとに置かれることもある。醍醐天皇が、少将定方を勅使として東宮に渡したのが始まりである。

故実を記すという営みは、単に、昔から伝えられる決まりや作法

を明らかにしてみせるというだけのものではなかった。現存する事柄について、それにまつわるさまざまな情報を総合し、勘案し、確かな認識を得ること。文書や口伝の形で流布するさまざまな言説を歴史の座標軸に沿って整理し、それが何故に由緒ある物事として重んじられるのか、何故に細かな決まりや作法が存在するのかを証し立てること。つまりは、身辺に蓄積された説話伝承の群から意味あるものを拾い出し、解釈を施し、新たなヴァリアントとして再生させるという作業に他ならなかったのである。

そうして再生された説話は、今や確かな一つの幻想を語り出す。『禁秘鈔』に記された剣璽は、畏敬すべき神器である。その由来は神代まで遡り①②、穢れの及ばぬよう常に厳重な禁忌を以て扱われる③④⑤。だが、それはあくまでも、『禁秘鈔』の言説の中に生み出された、幻想としての神器の姿である。

第一に、剣璽の扱いをめぐる厳格な決まりに関しては、それが果たして当時の実態をいうものであったかどうか、という問題がある。

まず、剣璽の所在について「夜ノ御殿ノ御帳ノ中ノ御枕ノ二階ノ上ニ案^ス」と述べるくだり③であるが、剣璽が夜御殿に安置されている、或いは夜御殿に置かれるのが本来の姿なのであるという認識は、『禁秘鈔』以前にも見られる。例えば、源師時の『長秋記』長承二年（一一三三）九月十八日条には、宝剣の緒が鼠に喰い切られたという事件に関して、藤原忠教の次のような発言を書き留めている。

御剣必在夜殿御所、主上必寝此所、而此二代捨置夜殿、他所御寝、此故如此事出来也、猶雖不御夜殿、内侍守護可候歟云々

忠教が言うには、天皇は必ず宝剣とともに夜御殿にあるべきもののために、先代の鳥羽の時から天皇が夜御殿で寝なくなつたせいだ、

かかる不祥事が出来たのだ、と。この慨嘆に対しては、師時も、「神靈緒損時如此歟」、この分ではいずれ神靈の筈の緒も危ないのではないか、と応じている。ここは、劍璽のみを夜御殿に置き去りにして天皇は他所で寝ていたと言っているのか、或いは、劍璽もまた天皇とともに本来あるべき夜御殿を離れていたと言うのか、おそらく前者であろうという以上には確実な判断を下し難いところであるが、少なくとも、劍璽は必ず夜御殿に置くべきものという認識は、相当の正当性を持つものとして存在していたことがわかる。

そして、劍璽の所在に関するこうした認識は、当時の実態からも、それ程かけ離れたものではなかったらうと思う。

源経頼『左経記』の「類聚雜例」長元九年（一〇三六）四月十七日条は、後朱雀天皇踐祚に伴って行われた劍璽渡御の儀を詳細に記録しているが、その中に以下のような記述が見える。

相府招内府（被候夜大殿内也）、被問之、奉安御帳内劍璽等、不令知女房奉取可被来者、内府婦人取之来座、関白相府受取之、奉安昼御帳内之後、召近衛司（左少将行経、同中将資房）、参候御帳前、関白相府褰御帳給、被仰可奉取之由、行経跪行取御劍、次資房取御璽出殿上、……

この時、儀式の執行を指揮した関白左大臣頼通は、まず内大臣教通に命じて、夜御殿にあった劍璽を女房に気付かれぬように持ち出させ、一旦昼御座の御帳の内に置いたものを近衛次将に取らせて後、ともに新帝の居殿に向かっている。これは、劍璽が夜御殿にあったことの明確に記録された例である。

なお、十一世紀末には成立していたとされる『侍中群要』では、「上格子事」に「上之後……昼御座乃御茵ヲ引展天大床子仁有留御劍ヲ取天御茵乃南仁柄遠西シ天刃遠南シ天置」、また「下格子事」には「引

反御茵取御劍天置大床子上御厨子」とあって、藏人には、朝は昼御座の大床子の上に立てた御厨子から剣を取って御座の南に置き、宵はまた御厨子に戻すという仕事があるとしている。益田勝実氏は、この記事を以て、『侍中群要』の時代には宝剣は昼御座にあったという見解を出している。仮にこの見方が正しいとすれば、さらに敷衍して、該当の記事は標目が「式抄」となっていることから、『寛平小式』の成った九世紀末、或いは『天曆藏人式』の成った十世紀半ばには、既にそうした習いがあったと考えることもできよう。だが、『侍中群要』の記事にある「御劍」は、所謂宝剣のことではなく、それとは別の、昼御座の御劍といわれるものを指している可能性が高いのではないか。この記事を以て劍璽の所在の実態を推し量ることは、多少の無理があると思うのである。

いつの頃からかは不明だが、遅くとも十二世紀半ばには、劍璽は夜御殿に安置すべきものだという認識が確立しており、また十一世紀半ばの時点では、実際に夜御殿に置かれてもいた。つまり、劍璽の所在に限って言えば、『禁秘鈔』の所説に、とりたてて問題とすべき点はないのである。むしろ注目したいのは、『禁秘鈔』に力説される劍璽の取り扱いの厳格さ（③④⑤）である。様々な禁忌の張り巡らされた中に、内侍の手で厳き護られる神器。『禁秘鈔』の記す劍璽の姿は、これまで挙げた幾つかの資料に照らし、それらが語るところの劍璽の姿と比較した時、かなり特異なものに映る。

『長秋記』の記事では、劍璽は極めて無防備な状態にある。天皇が夜御殿で寝るのでなければ、或いは劍璽が夜御殿を離れてしまえば、劍璽を護る者は誰一人いなかった。内侍は常に天皇の側にいても、劍璽の存在に対しては案外無頓着だったのだろうか。もっとも、『中外抄』仁平元年（一一五二）六月八日の条には、二日前に放火

で焼失した⁽³⁾四条内裏の荒廃ぶりを頭弁藤原朝隆が嘆じて、「鼠喰損御帳壁代、犬喰切昼御座御剣緒、大略連日事也。」と述べている記事もあるから、この時代、無防備な状態に置かれていたのは剣璽だけではなく、内裏が丸ごとそうであったという方が当たっているのかも知れない。

また、『左経記』の記事では、後一条天皇の崩御という緊急事態とはいえ大臣が夜御殿に伺候しており、剣璽渡御の儀は、女房の一切関知しないところで行われている。作法の一としてそのような方はあつたのだが『禁秘鈔』はそれを採らなかつた、と言つてしまえばそれまでである。しかしそれにしても、これらの記事から、神と神に仕える巫女とを思わせるような剣璽と内侍の関係も、夜御殿を神の鎮座する聖域として神聖視する意識も、窺うことはできない。

実際には、夜御殿に安置されるはずの剣璽が「白地^{ニモ}案^ニ朝餉^ニ」ということもあつたし、清浄に保たれるはずのものが「月ノ障^リ」内侍者。闕如之時或持^レ之^ヲ。」ということもあつたのだ⁽⁴⁾。だが『禁秘鈔』は、あくまでもそうした実態を超えたところに、畏敬すべき神器としての剣璽の像を結ぼうとしているのである。

ところで、『禁秘鈔』においては、宝剣を草薙剣に、神璽を八坂瓊曲玉になぞらえ、内侍所の神鏡と並べて所謂三種の神器とするという、後世一般に知られた神器観は確立しているのだろうか。

『禁秘鈔』の説く剣璽の由来のうち、特に神代の部分は難解である。例えば「御剣者。神代^ニ有三剣^一其^一也。子細雖^レ多^ト不^レ能^レ注^{スニ}。其後為^ニ宝物^一伝来。」というくんだり⁽¹⁾。

これについては『平家物語』巻第十一「剣」に、
吾朝には神代よりつたはれる霊剣三あり。十づかの剣、あまの

はやきりの剣、草なぎの剣是也。十づかの剣は、大和国いそのかみ布留の社におさめらる。あまのはやきりの剣は、尾張国熱田の宮にありとかや。草なぎの剣は内裏にあり。今の宝剣是也。とあって、宝剣の由来について、当時そうした言説の流布していたことが窺われる。しかし、それよりも厄介なのは、神璽の由来である。特に「自^ニ神代^一如^レセト見^ガ我^ヲ被^ニ誓置^一」というところ⁽⁴⁾。結論から言つてしまえば、『禁秘鈔』の説く剣璽の来歴は、大同二年（八〇七）斎部広成撰『古語拾遺』の所伝に通ずるものがあると思われる。『古語拾遺』の説の特徴を見るために、とりあえず記紀の所伝と比較しておこう。

記紀に記された剣璽に関する話は、およそ次のようにまとめられる。八咫鏡・八坂瓊勾玉は天岩屋の物語に、草薙剣は八岐大蛇の物語に、それぞれ起源を持つ（神代記・紀）。——三者は天孫降臨の際、瓊瓊杵尊に授けられた（神代記・紀一書第二）。或いは、天照大神が皇孫に「宝鏡」を授けて「視^ニ此宝鏡^一、当^レ猶^レ視^レ吾^ヲ。可^三与^同床共^レ殿、以為^ニ齋鏡^一」と言つた（神代紀一書第二）。——天皇が「神勢」を畏れ「共住」に安からずとして「天照大神」を笠縫邑に遷した（崇神紀）。——「天照大神」の祠を伊勢の地に立てた（垂仁紀）。——伊勢神宮の祭主倭姫命が日本武尊に草薙剣を授け、尊の死により剣は尾張に留まつた（景行記・紀）。

これに対して『古語拾遺』では、天孫降臨の場面を次のように記す。

天祖天照大神・高皇産靈尊、乃相語曰、夫葦原瑞穗国者、吾子孫可^レ王之地。皇孫就而治焉。……即以^ニ八咫鏡^一、及薙草剣二種神宝^一、授^ニ賜皇孫^一、永為^ニ天璽^一。〔所謂神璽剣鏡是也。〕矛玉自從。即勅曰、吾兒視^ニ此宝鏡^一、当^レ猶^レ視^レ吾^ヲ。可^三与^同

のであろう。

なお『禁秘鈔』は、神璽とは別に内侍所の鏡をも八咫鏡になぞらえているらしく、前段の「賢所」には、内侍所の鏡の由来について、次のように述べられている。

自^ニ神代^一為^ニ神鏡^一。如^ニ神宮^一奉^レ仰^ニ為^ニ伊勢御代官^一被^ニ留置^一也。神事次第同^ニ伊勢^一。世ノ始同^レ殿^ヲ御坐之間。主上朝夕不^レ放^ヲ。御本鳥^ヲ。仍^テ冠^ノ巾子^ニ融^シ緒^ヲ被^レ結。御冠^ノ穴此故也。垂仁天皇^ノ御宇。始別^レ殿御^ニ温明殿^一。

由来に続けて内裏焼亡の際の靈異譚を語っていることなどから、この説は、『平家物語』巻十一「鏡」や『撰集抄』巻九第一話「内侍所御事」に載る話と同一の系統に成ったものと思われる。ここでは、特に『撰集抄』の該当部分を抄出しておく。

天照太神の御誓に云く、「我孫をもては、天下のあるじとせん。汝が孫をもては、天下の政を執務せしめよ」と、天小屋根の尊に、仰られし時、御請たしかなりき。その御契、いまにたえせずぞおはしまし侍る。抑「我百王を守らん。をのくゝいかに」と仰のなり侍しに、天小屋根をはじめ奉りて、各々冠のこじを地につけて、あへて論言にそむき奉り給はざりしかば、「さらば、我形を鑄写て、日本の主と同殿にすへ奉れ」とて、神達御姿をうつしとゞめ給へりけるに、……内侍所をば、御誓の御詞にまかせて、主と同殿におはしましけり。崇神天皇御位の時、恐をなし奉せ給て、別の殿にうつし奉りにけり。宇多の御門の御時より、温明殿に入せ給へりけり。

『撰集抄』を引いたのは、冠の巾子^{こし}という話素に惹かれてということもあるが、鏡の由来譚に藤原氏の撰関「職」の由来譚が組み込まれているという特殊性を持ったためでもある。こうした類の話の生

まれたのは、それほど古いことではなからう。賢所に対する信仰は、九世紀以降徐々に形成され十一世紀初めに顕著となったとされるが、この話も、新たな宝鏡神話として、或いは時代の衣を着た内侍所起源譚として、その頃の宮廷社会に生まれ、伝えられていったのではないだろうか。

それにしても、『禁秘鈔』を綴った順徳天皇自身、剣璽に関する自らの記述に、どこまでの信憑性を認めていたのだろうか。それが畏き神器であるということだけは確かなのである。しかし、神器の由来や正体についての認識は、明らかに大きな揺れを見せている。

実際この当時、剣璽をめぐるのは、種々雑多な言説が流布していた。目立ったテーマとして、一つには、神璽の筥の中味に関するものがあり、もう一つには、宝剣の緒に巻き込められた鑑（かぎ）についてのものがある。藤原忠実の談話を記録した『富家語』の、応保元年（一一六一）の記事としてまとめられた中に、その二つのテーマをもとに含むものがあるので、まずこれから採り上げよう。

仰云、神璽ハ是筥内納印也。宝剣ハ付平緒。其平緒中納鑑、不納筥云々。

忠実は、神璽の筥の中味を、鏡でも玉でもなく、印であると考えていた。この説は、おそらく令の解釈学の流れを汲むのであろう。即ち「養老令」公式令には「天子神璽。（謂。踐祚之日寿璽。宝而不^レ用。」とあり、これに続けて「内印」「外印」「諸司印」「諸国印」の規定をしている。ここにいる「璽」は、具体的には天皇踐祚の時に授受される印を指している。『養老令』『古語拾遺』を併せ見れば、かつての「璽」という語が皇位の「しるし」の意に用いられ、また皇位の「しるし」としての「璽」は、具体的には鏡でも剣でも印でもあったことは確かなのだが、いつかそうしたことは不明となつて、

遅くとも十二・三世紀の頃には、神璽に関する諸説が生じていたのである。

勿論、神璽は玉であるという説もあった。青蓮院文書の『寛書』に、建仁四年（一二〇四）正月一日書写の奥書を伝える文の写しがあり、そこに、壇ノ浦の戦の際に内侍が神璽の筥の中を窺見したという伝聞録が見える。

神璽箱ハ浮海上之間、武士不知何物、愁開見之云々、其時尹明法師女子為内侍之間、粗伺見之、二懸子也、上下各入珠玉四果、都合玉八果在之云々、粗伝聞之

内侍が見たというのは實在の玉だったのか、それとも一瞬の幻影だったのか。内侍が神璽の筥の中に玉を見たという事さえ、或いは、これを伝え聞き語り継ぐ人々が同時に経験した白昼夢だったのかも知れない。

さて、『富家語』の記事の後半の部分は、ただ、剣を付けた平緒の中に鑑が納められている、というだけのことであるが、これに続けて、「件鑑関日本門鑑歟。令猷御体歟。」と、筆録者高階仲行の但し書きがある。意味の取りにくいところだが、この鑑は撰関家が献上した物か、と推測しているのであろう。その根拠をこの記事から読み取ることは不可能だが、当時の忠実の雑談のうち記録されなかったものには、こうした推測を呼び起こす話もあったかも知れない。なお、当該部分を「件鑑関日本国鑑歟。」とする本もある。

宝剣の緒に納められた鑑については、大江匡房談・藤原実兼撰の『江談抄』にも、かなり長文の記事がある。この記事は、匡房が「人」——おそらくは源経信——からの伝聞として語ったことの記録で、内容はおおよそ次のようなものである。

或る人の言うには、御剣の鞘には五六寸程の大きさの物が巻き

付けられているのだが、それが何物であるのかは、誰にもわからない。但し、藤原資仲自選の書物には、以下のようにある。

「資仲の父である故大納言資平の教命に曰く、私（資平）は三条天皇に殿上人として仕えた。或る日無名門から参内すると、天皇は殿上の御椅子におられ、謹んで地上に拝跪した私に、小板敷に昇るよう命じられた。天皇が仰せられるには、『御剣の鞘に巻き付けられている物があるが、これは何なのか。お前は聞いている事はあるか。』と。私は、『至愚の身には、そのような事は到底分かりません。』と奏したが、天皇はなお答えを促される。そこで、『確かな説は聞いておりませんが、ただ、或る人によれば、これは大刀の辛櫃の鑑ではないかということです。』と奏すると、天皇は感心しておられた。後日、大江景理が私に語ったところでは、天皇は、『これまで秘事を尋ねても皆知らなかつたのに、資平の言う事は理に叶っていて全く感心した。』と仰せられたそうだ。そもそもこの鑑の事は、父の右大臣実資がそう言われたのである。またこの事は、祖父清慎公実頼の口伝にもある。」と。また、或る説によれば、神璽の筥の鑑は宝剣の組紐に巻き込められているということが、醍醐天皇の日記に記されているという。これは秘事である。

宝剣の鞘には何かが巻き込められているらしい。だが、剣を抜くことは決してないのだから、それに巻き付けてある物が何であるのかは、天皇を初めとして誰一人知らなかつたのである。小野宮流には、実頼——実資——資平——資仲というように、代々、それは「大刀御辛櫃鑑」即ち大刀契を納める辛櫃の鑑であるという説が伝えられていた。また、これとは別に、「神璽筥鑑。纏二宝剣之組一纏籠」、つまり宝剣の鞘に巻き込められているのは神璽の筥の鑑であるとい

う説もあった。後者の「或説」は、『群書類従』本では「江左大承説」即ち大江齊光の説となっており、その本文を採るとした場合には、匡房自身が家伝として受け継いだ説を、ここに紹介しているのだとも読める。

なお、宝剣の緒の鑑については、『禁秘鈔』「大刀契」の項にも記すところがある。

節刀鑑。天曆帝付^二宝剣ノ帶取^一。不^レ離^二御身^一云々。

これによれば、宝剣に付けられているのは、神璽の筥の鑑ではなく大刀契の節刀を納める辛櫃の鑑であり、『江談抄』の記事に言う小野宮流所伝と同様である。それにしても、同じ宝剣に付けられた何物かについて、一方では醍醐天皇日記にありとして神璽の筥の鑑という説が伝えられ、また一方では、村上天皇の故事として大刀の辛櫃の鑑という説が唱えられる。剣璽をめぐる故実の世界が、如何に錯綜した情況にあったかがわかるであろう。

故実への関心は、あくまでも現在の物事に発するのであり、その形成については、古い記録や文書ばかりでなく、親しい主従の間に交わされる日常的な談話や巷間の噂話の与るところが大きかった。

先に挙げた『富家語』の記事の、引用に続く部分は、陽成天皇が神璽の筥を開けたところ白雲が起ち、恐怖に駆られた天皇はその筥を打ち捨て、紀氏内侍に紐をからげさせて収めたという話、また、同じ天皇が宝剣を抜いたところ剣が夜御殿の塗籠の中を飛翔し、打ち払おうとした天皇をよそに自ずと鞘に収まったという話になっていて、その部分が、特に説話としての興味を以て『古事談』第一に採られていることは、知られる通りである。天皇家累代の宝器として、また皇位の証しとして重んじられながら、それが一体何物であるのか、由来も明らかでなく、誰一人正体を知らぬ物。その神秘性ばかり

りを肥大化させつつ、剣璽をめぐる言説は、あらゆる形で拡げられ、積み重ねられてゆく。そうした中から、いずれ確固とした神器観なるものが形作られてゆくのはあろうが、少なくとも十三世紀前半までの情況を見る限り、それはあくまでも流動的な、形成の途上にあるものと考えられない。ただ、『禁秘鈔』の叙述を通して表れる極端なまでに神聖化された剣璽の姿は、錯綜した言説の行き着くところを、おぼろげながら予感させるものではあろう。

以上、『禁秘鈔』の説くところを手がかりに、剣璽に関わる言説を追って見たものの、ここに至っていささかの戸惑いを感じている。例えば、『禁秘鈔』において斯くも剣璽を神聖化してみせた順徳天皇もやはり、清涼殿の二間には仏を安置し、夜居僧に夜ごと修法を行わせていたのであろう。『禁秘鈔』では、夜御殿は塗籠ではなく「四方^二有^二妻戸^一」となっている。だとすれば、畏敬すべき神器とともに夜御殿に籠りながら、天皇は妻戸一枚を隔てた隣の二間より漏れ来る念誦の声を、どのような想念を以て受け止めていたというのだろうか。また、慈円は『慈鎮和尚夢想記』に、建仁三年（一一〇三）の夢想によつて得たところの、宝剣は国王の体、神璽は玉女・皇后の体である云々といった密教による解釈を記しているが、当時あらゆる形で飛び交った言説の中に、こうした類の仏教的説明は、どのような位置付けをされていたのだろうか。剣璽の由緒や正体について、あれほどまでに旺盛な好奇心、探求心を示した宮廷貴族たちは、こうした類の説に出会った時、故実の世界には属しやうもない奇抜なものとして顧みもしなかったというのだろうか。

『禁秘鈔』からおおよそ一世紀の時を隔て、『建武年中行事』は、剣璽の内侍を従えた天皇の南殿出御を儀式次第の一として淡々と記す。そこに現れる天皇の像は、後醍醐の面影と重なるようでもある。

全く異質なもののようにも見える。故実の世界に積み重ねられて来たさまざまな言説を、後醍醐が知らなかったはずはない。それでも剣璽と式の笏とを左右の脇に配した紫宸殿の御帳の中から群臣に宴を賜う天皇の像と、密教に傾倒し、在位中に伝法灌頂を受けるという異例の行跡さえ伝えられる後醍醐天皇の像との間には、大きな間隙が、或いは飛躍があるように思われてならない。両者を繋ぐものと、切断するものと。それらを見定めるためには、あまりにも多くの課題を手つかずのままに背負ってしまったようである。

注

- (1) 意識にあたっては、『禁秘鈔』『掌侍』『女房』の項、及び滋野井公麗の『禁秘鈔階梯』（『新註皇学叢書』）を参考にした。
- (2) 益田勝美氏『火山列島の思想』『日知りの裔の物語』
- (3) 『本朝世紀』
- (4) 『禁秘鈔』『掌侍』
- (5) 大石良材氏『日本王権の成立』第九章「大刀契」
- (6) 益田勝美氏『説話文学と絵巻』『説話の世界』
- (7) 『禁秘鈔』『御持僧事』
- (8) 『禁秘鈔』『夜御殿』
- (9) 阿部泰郎氏『中世王権と中世日本紀』（『日本文学』一九八五年五月）、山本ひろ子氏『幼主と「玉女」』（『月刊百科』三一三、一九八八年三月）
- (10) 『神皇正統記』

*本文出典一覧

- 『建武年中行事』——『群書類従』
- 異文は、和田英松註解・所功校訂『新訂建武年中行事註解』に拠る。
- 『内裏式』『西宮記』『北山抄』『江家次第』——以上、『神道大系』
- 『禁秘鈔』——『群書類従』
- 『侍中群要』『江次第鈔』——以上、『統々群書類従』
- 『妙音院相国白馬節会次第』『中外抄』——以上、『統群書類従』
- 『大内裏図考證』——『新訂増補故実叢書』

『養老令』——『日本思想大系』

『古語拾遺』——『神道大系』

『左経記』『長秋記』——以上、『増補史料大成』

『江談抄』——江談抄研究会編『古本系江談抄注解（補訂版）』

『富家語』——益田勝美氏による翻刻『富家語』（『中世文学の世界』所収）

異文は、宮田裕行編『校本「中外抄」・「富家語」とその研究』に拠る。

青蓮院文書『覚書』——『帝室制度史』

『日本書紀』『平家物語』——以上、『日本古典文学大系』

『撰集抄』——安田孝子他校注『撰集抄』（『古典文庫』）

原則として旧漢字は新字体に改め、注記は（ ）内に一行書きとした。また、引用にあたつて、『建武年中行事』については、『新訂建武年中行事註解』により仮名遣い・文字遣い等を改め、『江次第鈔』『中外抄』『大内裏図考證』については、私に句読点を改めたり加えたりした。